

「シンガポール国立大学分析アジア哲学プログラム 参加報告書」

京都大学文学研究科修士課程 2 回 佐々木 尽

以下では「シンガポール国立大学分析アジア哲学プログラム」に関して、内容及び学習成果、海外経験、そして今後の進路への影響という観点から簡潔に報告する。

● プログラム内容及び学習成果

本派遣プログラムは主に、派遣先の National University of Singapore (シンガポール国立大学。以下 NUS と記す) 及び Yale-NUS College (以下 Yale-NUS) という隣接する二大学において開催されるセミナーを受講しつつ、先生や現地の学生とディスカッションを深めるというものであった。

昨 2014 年度の同プログラムでは「心の哲学(Philosophy of Mind)」が全セミナーを貫くテーマとなっていた。対して今年度は、事前に各派遣者が関心を持つテーマを予め先方へ伝え、それに対応したセミナーを用意してもらうという形式を取った。そのため、昨年度のプログラムに比して、より各派遣者の関心に合ったセミナーが開催されることとなつたし、事前に配布されたアサインメントへの取り組みについても、各人がより強いモチベーションを維持しながら取り組めたように感じられる。

それに伴い、昨年に比して学習成果も各派遣者の分野に対応したものになった。派遣者としての私にとっても、昨年のテーマであった「心の哲学」は自らの専門分野からは離れた、いわば「新しい」領域であったため、基礎的な知識や思考法を学ぶに留まっていた。しかし今年度は自らの専門分野に近い領域が扱われたために、より発展的な学びを手に入れることができ、ディスカッションにも積極的に参加することができたように思われる。

まとめるならば、派遣者にとって昨年度のレクチャーシリーズは「新たな領域へと踏み込む」ことを主題としたものであり、今年度のそれは「馴染みのある領域を掘り進める」ことを主題としたものであった。これは学習及び研究として、どちらが優れているか、という順序をつけられるものではない。そのため 2 年連続でプログラムに参加し、二つの主題に触れることができたことはとても幸いであつたし、以降の研究に是非活かしていきたいという思いを抱かせるに足りるものであった。

● 海外経験として

派遣者は過去に二度、同プログラムでシンガポール国立大学を訪れており(2013 年度 2 月, 2014 年度 3 月)、現地の研究者や学生との関係性はある程度確立していたと言える状態で今年度のプログラムを迎えた。そのため過去の二度に比しても、自分の研究という意味ではもちろんのこと、現地の文化や生活を知るという意味でも、よりスムーズで内容の多いコミュニケーションを図ることができた。また、このスムーズなコミュニケーションは上述のセミナーでも活かされ、ディスカッションへのスムーズで積極的な参加という意味でも、やや上達を感じることもできた。

● 今後の進路への影響

派遣者は現在修士課程に在学しており、将来は博士課程への進学を希望している。そしてゆくゆくは研究職に就くことを目指している。その過程で、海外への留学が必要になる可能性は極めて高く、それゆえ派遣者は海外留学へ強い関心を抱いている。研究分野との関わりもあるため、どの言語圏への留学を希望することになるかは未だ不透明だが、研究者としての「共通語」になりつつある英語圏を訪れ、研究活動を行うことは極めて貴重な機会である。このような機会を与えてもらったことには強く感謝の念を抱くところであるし、来年度以降に同様のプログラムが開催されるのであれば、是非再度参加したい。